

Title	近世オスマン海軍史研究の現状と課題
Sub Title	Recent studies and issues on the early modern Ottoman naval history
Author	相磯, 尚子(Aiiso, Naoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2024
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.93, No.1 (2024. 6) ,p.29 (29)- 52 (52)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20240600-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世オスマン海軍史研究の現状と課題

はじめに

近世オスマン海軍史研究は、i・H・ウズンチャルシユルの古典的研究を嚆矢として、組織史研究に重点を置いて取り組まれてきた。一九七〇年代以降、トルコ共和国内でオスマン文書史料が本格的に活用されはじめることより実証的な研究が行われるようになった。そして二〇〇〇年代には複数のオスマン史研究者によって海軍史の通史的な論集が⁽²⁾編纂され、また『オリエンテ・モデルノ』誌において「オスマンと海」と題する特集が⁽³⁾組まれるなど、海軍史研究への関心が高まった。この特集号の冒頭でP・ブルメットが述べているように、オスマン海軍は陸軍の副次的なものにすぎないという偏った見解が

近世オスマン海軍史研究の現状と課題

相 磯 尚 子

あった。⁽⁴⁾しかし、実証的研究の蓄積によりオスマン海軍の実態が具体的に明らかになるにつれ、こうした見解は修正されつつある。とりわけ地中海史研究において社会的・経済的な面からの考察が進むと、キリスト教世界対イスラーム世界といった二項対立的ではない、多文化が共生する地中海世界像が強調されるようになった。

そして近年では、トルコ歴史協会、海事博物館やピーリー・レイス大学などの学術拠点を中心として、多くの海軍史 (bahriye tarihi/ naval history) 研究を含む海事史 (denizcilik tarihi/ maritime history) 研究に関する複数の論集や、人物に着目したオスマン海軍の通史的⁽⁵⁾研究が出版され、軍事史研究でありながらも社会的・経済的な観点からの考察が増え、その主題も多様化しており、

オスマン海軍史研究は新たな局面を迎えていると言える。
う。

そこで本稿では、近年のオスマン海軍史研究の進展を踏まえて、オスマン海軍が常設的な組織となったと考えられている一五三四年から、主力戦艦の本格的転換により組織的にも変質をみた一六八二年までを扱った海軍史研究について、海軍組織史研究、軍事・造船技術史研究、海軍の活動に関する研究、海軍に関わった個人に関する研究という四つの主題に分け、研究の現状と課題を整理する。その上で、オスマン海軍の評価を巡る議論について若干の考察を試み、今後のオスマン海軍史研究の一助としたい。

一 海軍組織に関する研究

まずはじめに、海軍組織に関する研究で重要な功績を残したウズンチャルシュルの研究を基にオスマン海軍組織史を概観しておこう。¹⁾ オスマン帝国は一三五四年にチャナッカレ海峡に位置するゲリボルを征服すると、バヤズイト一世（在位一三八九―一四〇二年）の時代に造船所を建て、ここを海上軍勢力の拠点とした。当初はゲリボル県軍政官 Gelibolu sancakbeyi が海軍の責任者であ

った。メフメト二世（在位一四四四―四六、一四五―八一年）がコンスタンティノールを征服すると、金角湾に造船所を設置した。この造船所はガラタ地区のすぐ外側に位置していたためにガラタ造船所の名称でも知られ、セリム一世（在位一五二―二〇年）による増築を経て、一六世紀中頃にはその敷地がカスムパシャ地区を中心としてハスキョイ地区までに拡大し、金角湾北岸の大部分を占めるものとなった。スレイマン一世（在位一五二〇―六六年）の時代に海軍提督 (kapudân Paşa / kapudân-ı deryâ) 位が設置されると、その住居や海軍の行政機関である提督府 (divân-hâne) もゲリボルから移された。それによりこのイスタンブルの造船所が名実ともにオスマン海軍の中心拠点となり、海軍工廠 (Tersâne-yi Âmire) と呼ばれた。ここから派遣される帝国艦隊 (donanma-yi hümayûn) がオスマン海軍の主力艦隊であった。一六八二年にガレオン船の本格的な導入が行われると、海軍提督の下に海軍大将に相当するカプダーネ (kapudâne) や海軍中将に相当するパトローナ (patrona) が設置されるなどの組織改変も行われた。その後、セリム三世（在位一七八九―一八〇七年）による近代化改革までこの体制が維持されたのだった。

ウズンチャルシュルは、こうした海軍組織の成り立ちと発展に加えて、ゲリボルやルセなどオスマン帝国各地の造船所、海軍の役職や書記、職人、漕ぎ手、乗組員をはじめとする海軍工廠の人員、海軍で用いられた船種や装備、艦隊出航の際の儀式などの海軍の概要を示した。⁽⁸⁾

首相府オスマン文書館 Başbakanlığı Osmanlı Arşivi (現在の大統領府オスマン文書館 Cumhurbaşkanlığı Osmanlı Arşivi) に保存された行政文書史料に基づいた実証的なオスマン海軍組織史研究は、C・インバーによる研究が先駆的存在であったと言えよう。彼は一九七〇年に提出した博士号請求論文において、旧財務省移管帳簿群 (Maliyeden Müdever Defterleri) や枢機勅令簿 (Mühimme Defterleri) といったオスマン語の行政文書を用い、スレイマン一世期における海軍工廠の実態を解明した。⁽⁹⁾ のちに出版された彼のオスマン帝国史概論も一六五〇年までの海軍組織史を扱っている。⁽¹⁰⁾ 一七世紀における海軍工廠の組織構造や、そこで造船・修理がなされた船種やその隻数、資材の調達先などを詳細に解明したのはi・ボスタンである。⁽¹¹⁾ 彼の研究で重要なものは、点呼・給与台帳 (Yoklama ve Mevâcib Defterleri) から海軍工廠における職種とその人数や日給を解読して海軍

工廠の組織を整理し、海軍工廠において財務や調達、職人の管理を含めた造船に関する業務を担当する部門と、船長や水兵をはじめとする船の運用を担当する部門とが存在したことを解明した点であろう。⁽¹²⁾

海軍組織に関する研究では、オスマン海軍の長たる海軍提督が一定の関心を集めてきた。その職務は、軍事的指揮官として海軍を率いることと、エーゲ海島嶼州 Cezâyir-i Bahr-i Sefid eyaleti (以下、島嶼州) の州軍政官 (beylerbeyi) としてエーゲ海地方の治安維持を担うことであった。⁽¹³⁾ また、海軍工廠で生じた訴訟の取り仕切り及び帝国艦隊の出航の儀礼を規定する法 (kanûn-nâme) や諸史料における海軍に関する記述がS・ギョクヤイによって紹介されたほか、オスマン官僚組織における海軍提督の地位、その収入、海軍省設置後の職務変化についても整理された。⁽¹⁵⁾ 海軍提督位の常設化の時期をめぐっても検討が重ねられた。海軍提督位がバルバロス・ハイレッディン・パシャ Barbaros Hayreddin Paşa (一五四六年没) の就任によって設置され、常任のものとなったことは明らかにされていたが、ハイレッディンがアルジェ地域を実効支配した時期と、アルジェ州軍政官 (Cezâyirgarp beylerbeyisi) に任命された時期、ス

レイマン一世にイスタンブルへ招聘された時期、海軍提督および島嶼州軍政官に任命された時期がそれぞれ異なったために、海軍提督位設置の時期について混乱が生じていたと言える。この議論を経てアルジェ州の成立が一五三三年、海軍提督および島嶼州州軍政官位の設置が一五三四年であることが実証的に解明され、現在ではこれが通説として受け入れられている。⁽¹⁸⁾ このようにオスマン海軍史研究における海軍提督への関心は極めて高いことは、二〇〇二年に海軍提督に関してのシンポジウムが開催され、その成果が論集として出版されたことから明らかである。⁽¹⁹⁾

造船費用や遠征費用に関する研究では、オスマン文書館の旧財務省移管帳簿群を活用した事例研究が進められてきた。インバーは一五三九年のハイレッディン率いるヘルツェグ・ノヴィ遠征の事例から、海洋遠征にかかる費用を示した。⁽²⁰⁾ M・チザクチャは、一六世紀中頃から一七世紀前半までの海軍工廠における造船活動とその費用を、職人や乗組員の給与の面から分析した。⁽²¹⁾ 一七世紀の海軍工廠の職人や乗組員の日給に関しては、ボスタンが点呼・給与台帳を用いて網羅的に明らかにした。⁽²²⁾ 経済的観点から一七世紀中葉のクレタ戦争を検討したR・マー

フィーは、戦争中に乗組員の補充地となったクシャダスや、水や食糧の補給地となったキオス島をはじめとして、島嶼州全体の経済がクレタ戦争によって活性化されたと論じた。⁽²³⁾ 彼によれば、オスマン政府はより多くの戦争捕虜を獲得するためにクレタ戦争では陸上戦を好み、人的被害が大きくなる傾向にある海戦を出来る限り避ける方針であったという。戦争捕虜は漕手として重宝されたほか、その釈放のための身代金がオスマン帝国にとって重要な収入源となっていたという。⁽²⁴⁾ 造船や海戦に掛かる費用は、遠征のために用意された船に大宰相などの有力者によって寄贈されたものも多く、その経費が政府側の帳簿に記録されにくいこと、遠征の財源は各地方の特別税などに分散されてしまうことといった制約があるため、現在でも全体像の把握が進んでいない。

オスマン海軍ではガレー船の漕手として、罪人、キリスト教徒の戦争捕虜 (gebrān-i miri)、オスマン臣民、有給漕手 (bedel-i grifte) が利用されてきた。⁽²⁶⁾ ボスタンは一四九九年と一五五一年の漕手に関する記録を用いて、アヴァールズ税を利用したオスマン臣民の漕手徴発の仕組みとその際に生じた問題の対処について考察した。⁽²⁷⁾ アヴァールズ税に関する具体的な仕組みについては長らく

不明な点が多かったが、多田により一七世紀後半のボル
郡の徴発事例と、一六世紀中葉のトリポリ戦役の際の徴
発事例とが検討され、ひとつの割当戸 (evziâne) 当
たり何名という形で徴発人数を割り当てるといふ仕組み
であったことと、その割り当てに際して在地有力者が重
要な役割を負ったことが明らかにされた。⁽³⁰⁾ また、労働者
としての観点から漕手を考察した研究もある。

二〇一〇年代以降は、海軍工廠の社会的側面の考察が
活発に取り組まれている。とりわけイタリア語やスペイ
ン語の史料に依拠した研究が重要な成果を出している。

長年オスマン・ヴェネツィア関係史を研究してきたM・
ペダーニは、ヴェネツィアの文書史料を活用し、イスタ
ンブル海軍工廠で働いていたヴェネツィア人には、戦争
捕虜で奴隷となつて海軍工廠において有給で働かされた
人ばかりではなく、勧誘されたり志願したりしてやつて
きた人も多数含まれていたと主張した。⁽³¹⁾ その動機はより
良い賃金、すなわちより良い労働条件であった。K・フ
リートによれば、こうしたヴェネツィアからオスマン側
への人材流出を、ヴェネツィア元老院は一五五四年の時
点で問題視していた。⁽³²⁾ 海軍工廠内で働く西欧出身者は、
イスタンブルに滞在する密偵たちの貴重な情報源となる

など、⁽³³⁾ 他国による諜報活動にとって重要な役割を果たし
た。シマンカスやヴェネツィアに収蔵された書簡史料を
分析したE・ギュルカンは、一五六〇年から一五七〇年
代にかけて行われたハプスブルク家によるオスマン海軍
への密偵派遣や破壊工作を検討した。⁽³⁴⁾ 彼によれば、海軍
工廠への放火や戦闘中のガレー船内での反乱の扇動など
の破壊工作を狙つて多額の資金が動かされていたが、そ
の効果が限定的であつたために、レバント海戦以降には
こうした破壊工作が見られなくなったという。

ここまでイスタンブルを中心とした海軍組織に関する
研究を取り上げてきた。イスタンブル以外にもオスマン
帝国は大小合わせて六〇余りの造船所を有していたが、
海軍組織が置かれた代表的な地域としては、北アフリカ
とインド洋が挙げられよう。アルジェ州、トラブルスガ
ルプ州 Trablusgarp eyaleti、チュニス州 Tunus eyaleti
の三州はオスマン帝国に協力するバルバリア海賊を多く
抱えた地域としてガルプ・オジャクラル (Garp ocaak-
ları) と呼ばれて、オスマン海軍組織史研究においても
着目されてきた。エーゲ海周辺のオスマン帝国に協力的
な海賊たちと同様に、アナトリア南岸から北アフリカ沿
岸の海域を通航するキリスト教徒の船や地中海沿岸部を

掠奪したバルバリア海賊は、有事の際に不正規兵として活躍する「海のレヴェント (deniz levendleri)」と呼ばれ、オスマン帝国の海軍力を担う存在として重要視されてきた。⁽³⁶⁾ 彼らはハプスブルク家とオスマン帝国という二つの政治的勢力のはざまで、オスマン帝国の麾下にありながら独自の海軍力を発展させてきたのである。⁽³⁷⁾ 北アフリカ艦隊は必要に応じて海軍提督の指揮下に入ったが、その予算と調達の仕組みは、イスタンブルの海軍工廠を拠点とした海軍とは異なっていた。⁽³⁸⁾ ギュルカンは北アフリカ艦隊を軍事的戦略と諜報の観点から論じ、オスマン帝国が西地中海世界の情報を収集する上で北アフリカ艦隊が重要な役割を果たしたと強調した。⁽³⁹⁾

インド洋艦隊はスエズを拠点とし、エジプト州軍政官 (Mısır beylerbeyisi) の管轄下にあった。紅海・インド洋におけるオスマン海軍史研究の嚆矢となったのはC・オルホルの一連の研究である。彼はオスマン語やポルトガル語の史料を用いてエチオピア征服に関連したオスマン帝国インド洋艦隊の活動を明らかにしつつ、その組織についても考察した。⁽⁴⁰⁾ インド洋艦隊は、スエズ、モカ、マッサワ、サワーキン、アデン、バスラ、ラフサにある造船所を拠点とした。⁽⁴¹⁾ エジプトに関する枢機勅令簿と造

船に関する記録を検討したT・セヴィンチは、この艦隊がメッカとの航路の安全保障に重要な役割を果たしたことを指摘しつつ、アレップやアンタルヤから輸送された木材を利用したスエズにおける造船活動を詳細に明らかにした。⁽⁴²⁾ 彼はまた、バスラを拠点とするペルシャ湾の艦隊についても同様にその組織と造船活動を解明した。⁽⁴³⁾

以上のように、オスマン海軍組織史研究はオスマン語の行政文書を利用した実証的な研究を重ねつつ、近年ではより多角的な考察に取り組んできた。しかしながら、依然として社会的・経済的側面からの考察が課題として挙げられよう。海軍工廠は、機密保持のため高い壁に囲まれて出入りが制限されていたために、敷地内にモスク、食堂、公衆浴場などを備え、役人、船員、職人、荷役人など多くの人々が過ごしていたとされるが、これらの実態についてはほとんど明らかにされていない。彼ら労働者たちの構成や、居住地区、地域との関わりなどを検討することが、オスマン海軍の実態をより鮮明に解明するため必要であろう。

二. 軍事・造船技術史に関する研究

軍事・造船技術史研究は用語研究から出発した。一九

五八年に出版されたイタリア語とギリシア語起源のトルコ語海事用語辞典⁽⁴⁶⁾は、船に関する用語や、船上で用いられた掛け声をはじめとする海事用語の起源や、トルコ語、イタリア語、ギリシア語、スペイン語をはじめとする諸言語での用法が収集されており、現在でもこれに比肩する研究成果は現れていない。一九七五年にオスマン語史料で見られる船種名を整理したS・ソウジエクは、オスマン海軍で用いられた船種に関する研究の先鞭をつけた⁽⁴⁷⁾。ボスタンは絵画史料に基づいて船種を明らかにしつつ、オスマン海軍における造船技術の変遷を解明した⁽⁴⁸⁾。また、写本や絵画に描かれた船の細密画の分析や錨の技術的変化の分析⁽⁵⁰⁾などの研究もある。

オスマン軍事・造船技術史研究では、ヨーロッパとの比較が念頭におかれ、火器とガレオン船の導入時期に関する議論が重要視されてきた。地中海史研究では、イギリスやオランダで発達した砲撃戦を得意としたガレオン船が、地中海の白兵戦を得意としたガレー船を戦術的に上回ったために、一六世紀末以降の地中海ではイギリスやオランダが覇権を握ったという見方が長らく支持されていた⁽⁵¹⁾。この議論に大きな影響を与えたのはJ・ギルマルティンによる研究である。彼は、ディウ沖海戦やレパ

ント海戦を軍事的・戦術的観点から分析したうえで、一八世紀頃まではスペインやフランスも含めて地中海ではガレー船が維持され、一六世紀におけるオスマン帝国とスペインの海戦はガレオン船同士による砲撃戦ではなく、ガレー船同士の白兵戦を主体とする戦闘であったとして、これまでの見方に反論した⁽⁵²⁾。

地中海における軍事技術的な競争をめぐるこれらの議論は、主に西欧側の史料に基づいたものであったことから、オスマン帝国側の行政文書に基づいた実証的な研究による再検討が課題となった。枢機勅令簿を用いて海軍の資源の調達先を精査したインバーは、オスマン帝国が黒海沿岸部やイズミト湾周辺部をはじめとする豊富な森林資源によって造船に必要な木材が調達可能であったことに加え、エジプトを征服したことでローブに用いる麻などの繊維類や帆布、釘や火器のための鉄、漕手の人員など、海軍の運用と維持に必要な資源を全て領内から調達できるようになった点が、一六世紀中葉にヨーロッパ諸国と比較した際の強みであったと主張した⁽⁵³⁾。火器の技術はレコンキスタによってイベリア半島を追われたユダヤ教徒を介してオスマン海軍へ伝わり、一四九〇年代には船首砲として実用化されていたことが、宮武による

枢機勅令簿の検討から明らかとなった。⁽⁵⁵⁾その後マールイーの研究により、一七世紀末のオスマン海軍がガレオン船を主力としており、イギリス、フランス、オランダにおける造船技術の発展に追従していたことが明らかにされたこと⁽⁵⁶⁾から、それ以前にオスマン海軍におけるガレオン船への転換が図られたことが推測された。そしてボスタンが、クレタ戦争さなかの一六五〇年にオスマン海軍がガレオン船を主力戦艦としたこと、しかし練度の低さから戦果を挙げられず、キョプリュリュ時代を代表する大宰相ファズル・アフメト・パシヤ Fazl Ahmed Pasa (一六七六年没)⁽⁵⁷⁾の判断で一六六二年にガレー船を主力戦艦に戻したことを明らかにした。最終的には、一六八二年に大宰相メルズイフォンル・カラ・ムスタファ・パシヤ Merzifonlu Kara Mustafa Pasa (一六八三年没)⁽⁵⁸⁾のもとでガレオン船が主力戦艦とされたのだった。一度目のガレオン船への転換の際には北アフリカ艦隊の影響があったことが指摘されている。⁽⁵⁹⁾ヴェネツィア人技術者がオスマン帝国の海軍工廠で働いていた点からもヨーロッパの軍事技術が絶えずオスマン海軍へ流入していたと言えよう。⁽⁶⁰⁾

以上のように軍事・造船技術史研究では、ヨーロッパ

諸国との比較に力点が置かれて考察が進められてきた。近年ではオスマン帝国の海事技術の伝播に関して言えば、ヨーロッパ、とりわけヴェネツィアとほとんど同程度であったと考えられている。本分野の課題として、オスマン海軍における艦船の設計を記した図面類が発見されていないことから、木の継ぎ方や帆の張り方といった詳細な技術の発達についての検討が不十分である点を指摘できよう。また、オスマン海軍主導の技術革新の有無や、練度についても検討の余地がある。

三. 海軍の活動に関する研究

オスマン海軍の活動に関する研究は、主眼が海戦史に置かれ、そこで活躍した個人と関連づけて検討される傾向にあると言える。これは、海戦史研究の多くが、個人の功績を賞賛するために書かれた征服記や、それに依拠して書かれた年代記に基づいて研究されてきたことと無関係ではないだろう。地中海におけるオスマン海軍の活動に関して、一五三八年のプレヴェザ海戦⁽⁶¹⁾、一五六〇年のジェルバ島征服⁽⁶³⁾、一五六五年のマルタ島包囲⁽⁶⁴⁾、一五七〇年のキプロス遠征とその一連の軍事活動のなかで生じた一五七一年のレパント海戦⁽⁶⁵⁾、一五七四年のチュニス再

征服⁽⁶⁶⁾、一六四五年から一六六九年までのクレタ戦争⁽⁶⁷⁾などの海戦史が重点的に研究されてきた⁽⁶⁸⁾。

インド洋方面におけるオスマン海軍の活動に関する研究は、ポルトガルとの勢力争いと、イエメン州 Yemen eyaleti やエチオピア州 Habes eyaleti の設置と関連して論じられてきた⁽⁶⁹⁾。オズバランは、オスマン語とポルトガル語の史料からスエズやバスラ、モカ、ホルムズなどの地域におけるインド洋艦隊の活動を詳述し、紅海・ペルシャ湾・インド洋をめぐるポルトガルとの勢力争いを分析した⁽⁷⁰⁾。一六世紀のインド洋艦隊には地中海で活動していた船員たちが主力として参加しており、作戦の成否に少なからず影響を与えたという⁽⁷¹⁾。例えば、一五五四年にインド洋艦隊の提督であったセイディ・アリ・レイス Seydi Ali Reis (一五六二年没) も地中海で活躍した船員であった。彼が率いた艦隊はマスカット近海でポルトガル艦隊から攻撃を受けて遭難し、陸路でイランを経由してイスタンブルへ帰国して旅行記を記した⁽⁷²⁾。近年では、G・カザーレがオスマン帝国のインド洋への冒険事業を通史的に描き出し、そこで国家が先導する冒険的事業の潮流である大航海時代をオスマン帝国も迎えていたのだと結論づけ、オスマン帝国の地理学研究に新たな議論を

巻き起こした⁽⁷³⁾。これに関連して、オスマン帝国の支配者層が世界に関する地理的・空間的な理解をした上で政策決定をしていたという点で、オスマン帝国が大航海時代を迎えていたのだと主張する研究もある⁽⁷⁴⁾が、議論の枠組みが先行するあまりやや説得力に欠けるという批判もある⁽⁷⁵⁾。

黒海方面でのオスマン海軍の活動は、ドナウ河を通じてワラキアやトランシルヴァニアなどの国境地帯への支援を主目的とした活動と、帝国艦隊による黒海における活動を中心に研究されてきた。ドナウ河に設置された艦隊については、その組織や活動に関する具体的な検討が近年飛躍的に進んでいる⁽⁷⁶⁾。ドナウ艦隊は人員や資材の輸送に加えて、船を繋いで一時的な橋としても用いられた⁽⁷⁸⁾。ドナウ艦隊の設立はスレイマン一世期であったという⁽⁷⁸⁾。一七世紀以降、コサックによる海上略奪が激化した黒海では、キリアやシノプなどが海軍の拠点として利用されたが、巡視や攻撃の際には帝国艦隊がイスタンブルから派遣された⁽⁷⁹⁾。黒海におけるオスマン海軍の活動実態については未だ不明な点も多いが、帝国艦隊による黒海遠征の事例が検討され始めている⁽⁸⁰⁾。

以上のようにオスマン海軍の活動に関する研究は、海

戦史に主軸が置かれて検討されてきた一方で、他方では事件史的なものに留まり、海軍はオスマン社会から切り離されたものであったかのような印象を与えてしまっている。こうした点を乗り越えていくためには、名の知られた海戦以外の海軍の活動へ着目することが必要である。近年ではこのような着眼点での研究も増えてきている。例として、一五四〇年代のフランス海軍との共同作戦について再検討して外交的な側面からその意義を考察した研究や、カイセリリ・ハリル・パシャ *Kayserili Halil Paşa* (一六二九年没)⁽⁸²⁾ による一七世紀初頭の地中海遠征に着目した研究などが挙げられる。また海戦史も事件史的な観点ではなく、オスマン・ハプスブルク関係史の視点で再検討されるなど、新たな観点からの考察も取り組まれている。日常的な海軍の運用方法や実態について十分に明らかにしていくためには、補給や航路⁽⁸⁴⁾の検討が喫緊の課題であろう。

四・海軍関係者の人物研究

海軍の関係者としては、オスマン海軍で活躍したピーリー・レイス *Piri Reis* (一五五三年没) と、バルバリア海賊をオスマン帝国の麾下にもたらしたバルバロス兄

弟がまず着目された⁽⁸⁵⁾。ピーリー・レイスの著作『海洋の書 *Kith-i-Bahr*』と世界地図は、オスマン帝国⁽⁸⁶⁾における重要な地理学的作品としても着目されてきた。

バルバロス兄弟は兄のオルチ *Oruç* (一五一八年没) と弟のフズル *Hüsnü* (一五四六年没) を指し、彼らは海賊活動を通じて勢力を拡大して北アフリカで支配権を得た。弟のフズルがハイレッディンの名で呼ばれるようになった後に海軍提督に任命されると、オスマン海軍を改革し、プレヴェザ海戦での勝利の立役者となったことから、オスマン海軍史研究でも彼の存在が重要視されてきた。ハイレッディン遠征記や、叙述史料を活用したバルバロス兄弟の北アフリカにおける権力獲得の過程⁽⁸⁷⁾などが検討されたほか、ギリシア系とされるバルバロス兄弟の父祖の系譜についても注目されている⁽⁹⁰⁾。

彼らのような海のレヴェントはオスマン帝国の海軍力として重要な役割を担ったとされ、とりわけイベリア半島のムスリムの救出作戦を行ったケマル・レイスや、一五五〇年以降西地中海で活躍したトゥルグト・レイス *Turgut Reis* (一五六五年没)⁽⁹²⁾、一五七四年のチュニス再征服の立役者であるクルチ・アリ・パシャ *Kılıç Ali Paşa* (一五八七年没)⁽⁹³⁾ などが重点的に研究されてきた。

そして、ピーリー・レイスが叔父ケマル・レイス Kemal Reis (一五二〇年没) に奉公することで船乗りとしての経験を積み、西地中海における海賊活動を経てオスマン海軍の船長として活躍したという逸話のように、レヴェントの経歴は、オスマン海軍の船乗りの典型的な経歴であるとされてきた。⁽⁹⁴⁾しかし、先に挙げたレヴェントのうち海軍提督にまで昇進したのはバルバロス・ハイレッディンとクルチ・アリのみであり、一六・一七世紀の海軍提督の多くは、宮廷で教育を受けたエリート官僚であった。⁽⁹⁵⁾近年ではこうした官僚たちの海軍提督としての活動が検討されている。例えば、一五六〇年のジェルバ島遠征や一六五六年のマルタ島遠征と一五七〇年のキプロス島征服遠征を指揮したピヤレ・パシヤ Piyale Paşa (一五七八年没) は、クロアチア系でモハーチの戦いで戦争捕虜となり、宮廷で教育を受けたのち一五四七年からオスマン官僚の道を歩み初め、一五五五年に海軍の指揮者となると前述の通り多くの海洋遠征を成功に導き、一五七三年まで海軍を率いて活躍した。⁽⁹⁶⁾他にも、ダーマート・ハリル・パシヤ Dâmad Halil Paşa (一六〇三年没)⁽⁹⁷⁾やカイセリリ・ハリル・パシヤ、⁽⁹⁸⁾チャタルジヤル・ハサン・パシヤ Çatalcalı Hasan Paşa (一六三二

年没)⁽⁹⁹⁾に関する事例研究が挙げられる。M・メネクシエはクレタ戦争開始時の海軍提督スィラフダール・ユスフ・パシヤ Silahdar Yusuf Paşa (一六四六年没) の活動と彼の周囲の政治的状況を分析し、ハニヤを征服した有能な官僚でありながら、政治的敵対者による悪意ある報告が原因でスルタンに処刑されたシラフダール・ユスフは、オスマン宮廷における政治的混乱の被害者であったと評価した。⁽¹⁰⁰⁾また、ヴェネディクリ・ハサン・パシヤ Venedikli Hasan Paşa (一五九一年没)⁽¹⁰¹⁾や、ジュガラザード・スィナン・パシヤ Çugalazade Sinan Paşa (一六〇五年没)⁽¹⁰²⁾などの官僚出身でヴェネツィアに親族を持つ海軍提督も、外交上の影響力を持っていた点で重視されている。⁽¹⁰³⁾

海軍提督よりも下位の海軍関係者については、未だ十分な研究がなされているとは言い難い。オスマン官僚であるコジャ・スィナン・パシヤ Koca Sinan Paşa (一五九六年没) とヒュサム・ベイ Hüsam Bey (一五九四年以降没) の関係に着目したC・イソム＝ヴェルハーレン⁽¹⁰⁴⁾は、ヒュサムが賄賂を送り続けた結果、大宰相に就任したばかりのコジャ・スィナンの仲介で海軍提督の候補としてスルタンへ推薦されたことを明らかにして、海軍に

おける昇進にパトロネージ関係による支援が必須であったと指摘した。パトロネージ関係に基づく人的紐帯を形成することは、近世オスマン帝国の官僚たちにとって昇進に不可欠な要素であったが、これは海軍においても例外ではなかったことになる。ヒュサムはグリボルの宮廷で教育を受け、イエニチエリとなったのちに海軍に協力する海賊となり、海軍工廠の船長となったのちイエメンへの遠征にも参加し、ロドスなどの県軍政官を歴任して海軍提督に推薦されるまでになり、約四〇年間海軍で活躍した。⁽¹⁰⁶⁾ヒュサムが宮廷で教育を受けた後にイエニチエリとなった経歴を見ても、オスマン海軍を支えた船員が必ずしもレヴェントばかりでなかったことが分かる。その一方で、オスマン帝国の軍人でありながらも掠奪行為に参加していたことは明白である。掠奪で得た戦利品をスルタンや高官へ献呈することが海軍人としての評価となり、海軍での出世に繋がっていたのである。

以上のように、海軍に関係する個人の研究は、レヴェント出身の海軍提督や著名な船長たちを中心に進められ、次第にその裾野を広げ、海軍における人材の多様性が明らかにされてきた。しかしながら、海軍提督よりも下位の人員に関する事例研究の積み重ねが今後の課題である

と言える。

五・海軍の評価の再考に向けて

以上を踏まえ、一六・一七世紀におけるオスマン海軍の再評価へ向けて議論の整理を試みたい。これまでオスマン海軍史における時代区分は、その黎明期から一五三三年まで、海軍提督の設置により海軍組織が一定の常設的な組織となったと考えられている一五三四年から近代化改革をめざした海軍省設置の一八六七年まで、そして近代化改革以降の三期とされてきた。このうち第二期にあたる三〇〇年以上の期間が、一六世紀におけるプレヴェザ海戦での勝利や一七世紀におけるクレタ戦争の長期化、一八世紀におけるロシアの南下と一七七〇年のチェシメ海戦での敗北といった歴史的事件を含むにもかかわらず、一括りにして論じられてきたことには些か問題があろう。

第二期のうち、本稿が取り上げた一六八二年までのガレー船時代においても、プレヴェザ海戦に代表されるスレイマン一世期がオスマン海軍の最盛期として評価されているが、一六世紀末・一七世紀の評価は研究者の間で一定ではない。とりわけレパント海戦の影響の評価が分

かれている。レバント海戦の翌年にオスマン海軍の軍艦数が前年の水準まで回復していることを示したインバーは、レバント海戦をオスマン海軍の衰退への転換点として評価することへの疑問を呈した⁽¹⁰⁾。しかし、熟練の船乗りたちを含む二万人以上の死傷者と一万人以上の遭ぎ手の喪失はただちに補えるものではないという、人的資源への影響を重要視する研究もある⁽¹¹⁾。

そもそもレバント海戦の評価をめぐる議論の背景には、一六四五年から始まるクレタ戦争の決着に二五年も要したことをオスマン海軍の衰退として評価する見解がある。しかし、その衰退の評価は、オスマン海軍それ自体の組織性質や運用方法、技術やそれらの変化などを具体的に検討した上でなされたわけではない。例えば、一八世紀のオスマン海軍史を専門としながら一五七二年から一九二三年を扱うオスマン海軍史の大著を上梓したD・パンザックは、レバント海戦後の一五七二年から一六八二年をオスマン海軍の衰退期とし、その原因を七五年余りにわたる海戦経験の無さに求めた。彼と同様に、一八世紀初頭までにオスマン海軍が経験した海戦を時系列で整理したソウジェクは、一六世紀後半から一七世紀前半にかけて起こった海戦を、一五二二年のロドス島遠征、一五

三八年のプレヴェエザ海戦、一五五五年のトリポリ戦役、一五六〇年のジェルバ島遠征、一五七〇年から七三年のキプロス島の遠征、一五七一年のレバント海戦、一五七四年のチュニス遠征、一六四五年のクレタ戦争であったとした⁽¹²⁾。こうした一五七五年から一六四五年までの期間に海戦は起こらず、夏季の巡視航海による沿岸防衛に徹していたという「海戦の空白期間」というべき見方は、オスマン帝国史研究においてしばしば語られてきた。この見方がどのような経緯で形成され、どの程度流布していたかは詳細な研究を待たねばならないが、少なくとも一九世紀に書かれた『ジェヴデト・パシヤ史 *Tarih-i Cendel*』にも見られる。この「空白期間」とクレタ戦争の長期化を主な根拠に、一七世紀のオスマン海軍に対し衰退という評価がなされてきたのである⁽¹³⁾。

しかし、近年の海軍史研究をみれば、この時期が決して「海戦の空白期間」でないことが明らかであろう。第三章で検討したように、著名な海戦以外にも海軍による攻撃が地中海・黒海で行われていたことが明らかにされているほか、近世オスマン海軍に関する第一級の叙述史料であるキヤーティブ・チェレビ *Katib Celebi* (一六五七年没) の『諸海への遠征における高貴な贈り物 *Tuh-*

feri'i-kibar fi Esfari-bihar』¹³⁾ 一五八八年のウルチ・ハサン・バシヤ Uluç Hasan Paşa (一五九一年没) による北アフリカ遠征や、一六一四年のマルタ島略奪、一六一四年から一六四〇年まで断続的に派遣された黒海遠征などがあり、通常の巡視航路であるイスタンブルや島嶼州を離れ、攻撃目標をもって軍事活動が行われたことが確認できる。¹³⁾ したがって、このような「海戦の空白期間」という捉え方の見直し、そしてそれを理由とするオスマン海軍の衰退の評価も改めて議論していく必要がある。

海軍の再評価に際しては、「海戦の空白期間」と呼ばれてきたこの時期が、地中海においてオスマン帝国とハプスブルク家との競合が終結し、海賊の時代とさえ言われる状況にあったことを考慮すべきである。このような状況下では大規模な海戦は生じ得ず、代わりに海賊に対する沿岸警備などが海軍にとって重要課題となった。求められる海軍力の性質も変化したと考えられる。したがって、例えば東地中海における防衛網のあり方の変化や、海軍提督の下に所属したデルヤー・ベイと呼ばれる県軍政官たちなど、海賊対策の担い手として重要な役割を担った存在にも着目して論じるべきである。その上で、本

稿で検討してきたような海軍組織や軍事技術・造船、活動、海軍を構成した人物に関する実証的研究の蓄積を踏まえ、総合的にオスマン海軍を再評価していくことが、今後のオスマン海軍史研究の課題であると言えよう。

おわりに

オスマン海軍史研究は、史料に依拠した実証的な研究を柱として制度史研究が重要視されてきた傾向にあった。近年では海軍の活動地域や、海軍の船乗りや海軍工廠の職人の多様性、船長経験のない官僚主導の海軍の活動に対する再検討など、より多角的な面からの考察が進められていると言えよう。しかし、さらに具体的にオスマン海軍の性質を解明し、再評価していくためには、日常的な艦隊運用の実態や、より下位の海軍従事者たちに関する検討が不十分である。こうした課題を解決していくためには、オスマン語以外の史料や、外国に残るオスマン語史料など、これまで利用されてこなかった史料の活用や、海賊に対する沿岸防衛のあり方などの事件史的でない海軍の活動への検討が必要であろう。他勢力の海軍との比較だけではなく、オスマン海軍それ自体の性質についての社会的・経済的・技術的な諸側面の総合的検討を

経てこそ、近世オスマン海軍史の再評価が可能になるのではないだろうか。

註

- (1) Uzunçarşılı, İsmail Hakkı, *Osmanlı Devletinin Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 1948.
- (2) Bostan, İdris, and Salin Özbaran (eds.), *Bağlangıçtan XVII. Yüzyılın Sonuna Kadar Türk Denizcilik Tarihi*, İstanbul: Deniz Basımevi Müdürlüğü, 2009.
- (3) *Oriente Moderno* (ズレ OM), 20/1 (2001). 1) 6 巻版のオスマン海軍史研究の動向と課題について Sakul, Kahraman, “Osmanlı Askerî Tarihi Üzerine Bir Literatür Değerlendirmesi”, *Türkiye Araştırma Literatür Dergisi*, 1/2 (2003), pp. 529–71, esp. pp. 563–67; Zorlu, Tuncay, “Osmanlı Deniz Teknolojisi Üzerine”, *Türkiye Araştırmaları Literatür Dergisi*, 4/2 (2004), pp. 297–353. ※参照をみたす。
- (4) Brummert, Palmira, “The Ottomans as a World Power: What We Don’t Know about Ottoman Sea-Power”, *OM*, 20/1 (2001), pp. 1–21.
- (5) Couto, Dejanirah, Feza Günergün, and Maria Pia Pedani Fabris (eds.), *Seapower, Technology and Trade: Studies in Turkish Maritime History*, İstanbul: Piri Reis University Publications, 2014; Gümüşçü, Osman (ed.), *Uluslararası Piri Reis ve Türk Denizcilik Tarihi Sempozyumu: 500 yılın Ardından Piri Reis ve Eserleri*

Bildiriler, 26–29 Eylül 2013 (ズレ Piri Reis Sempozyumu), vol. 1–6, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2014.

- (6) Isom-Verhaeren, Christine, *The Sultan’s Fleet: Seafarers of the Ottoman Empire*, London: I. B. Tauris, 2022.
- (7) Uzunçarşılı, *Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*, pp. 394–96, 414–36. 434頁、海軍提督館編のオスマン海軍史研究についてズレの所収を参照をみたす。İnalçık, Halil, “The Rise of the Turcuman Maritime Principalities in Anatolia, Byzantium, and the Crusades”, in *The Middle East and the Balkans under the Ottoman Empire, Essays on Economy and Society*, Bloomington: Indiana University Turkish Studies and Turkish Ministry of Culture, 1993, pp. 309–41; Fleet Kate, “Early Turkish Naval Activities”, *OM*, 20/1 (2001), pp. 129–38; Bostan, İdris, “Osmanlıların Denizlere Açılma Sürecinde Gelibolu”, in *Beşikten İmparatorluğa Osmanlı Denizciliği*, İstanbul: Kitap Yayınevi, 2006, pp. 33–46; İnalçık, Halil, *Osmanlı Deniz Egemenliği*, İstanbul: Türkiye İş Bankası Kültür Yayınları, 2023, esp. pp. 3–199.
- (8) Uzunçarşılı, *Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*, pp. 389–511.
- (9) Imber, Colin, “The Administration of the Ottoman Navy during the Reign of Suleyman I, 1520–1566”, unpublished Ph.D. diss., Cambridge University, 1970. 1) 2011年10年に投稿論文として発表をみたす。2) 2018年12月、Imber, Colin, “The Navy of Suleyman the Magnificent”, *Archivum Ottomanicum*, 7 (1980), pp.

211-81.

- (10) Imber, Colin. *The Ottoman Empire, 1300-1650: The Structure of Power*. Basingstoke: Palgrave, 2002.
- (11) Bostan, İdris. *Osmanlı Bahriye Teshkilâtı, XVII. Yüzyılda Tersâne-i Âmire*. Ankara: Türk Tarih Kurumu, 1992.
- (12) Bostan, Osmanlı Bahriye Teshkilâtı, pp. 31-79.
- (13) Uzunçarşılı, Merkez ve Bahriye Teshkilâtı, pp. 41-431.
- (14) Gökçay, Orhan Saik. "Osmanlı Donanması ve Kapudan-ı Derya ile İlgili Teshifat Hakkında Belgeler", *Tarih Enstitüsü Dergisi*, 12 (1982), pp. 25-84. 44頁 海軍提督の名で裁かれた訴訟がめったに記録されつづきぬもの、ゆっつとした訴訟の文書は1100-1300年現在発見もれつづきぬ。
- (15) Aybars, Pamir. "Kaptan Pasa ve Hukukî Statüsü", *Ankara Üniversitesi Hukuk Fakültesi Dergisi*, 53/3 (2004), pp. 39-60.
- (16) S. Özbaran. "Kapudan Pasha", in *Encyclopædia of Islam*, 2nd ed. (Cite EI²), vol. 4, 1978, pp. 571-72.
- (17) 島嶼州とアルジェ州のふちふちの「複数の島」を意味するジェザールという語が含まれており、史料中で単にジェザール州という語が使われた場合、島嶼州を意味することも多いために、かつてはアルジェ州の地域を拡大して島嶼州が形成されたと考えた(例えば、C. F. Beckingham, "Djazā'ir-i Bahri-i Safid", in *EI²*, vol. 2, 1991, pp. 521-22)。島嶼州の構成地域の研究により、アルジェは島嶼州に含まれていなかったことが明らかにされた。
- (18) 堀英樹「オスマン朝になつてジェザール州の成立—創設時になつての領域を中心に—」『イスラム世界』六三三号、二〇〇四年、一—二〇頁。
- (19) Bostan, İdris. "Establishment of the Province of Cezayir-i Bahr-i Sefid", in Elizabeth Zachariadou (ed.), *The Kapudan Pasha: His Office and His Domain*, (Cite *The Kapudan Pasha*), Rethymon: Crete University Press, 2002, pp. 241-51; Bostan, İdris. "Cezâyir-i Bahr-i Sefid Eyaletinin Kuruluşu, 1534", *Tarih Dergisi*, 38 (2003), pp. 61-78; Bostan, İdris. "Kapudan Pasa", in Kate Fleet et al. (ed.), *Encyclopædia of Islam*, Three, Leiden-Boston: Brill, 2021, http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_32992 (consulted online on 26 September 2023).
- (20) Zachariadou (ed.), *The Kapudan Pasha*.
- (21) Imber, Colin. "The Costs of Naval Warfare: The Accounts of Hayreddin Barbarossa's Hecceg Novi Campaign in 1539", *Archivum Ottomanicum*, 4 (1972), pp. 203-16.
- (22) Çizakça, Murat. "Ottomans and the Mediterranean: An Analysis of the Ottoman Shipbuilding Industry as Reflected by the Arsenal Registers of Istanbul 1529-1650", in *Le Geni Del Mare Mediterraneo*, 1981, pp. 773-87.
- (23) Bostan, Osmanlı Bahriye Teshkilâtı, pp. 31-79.
- (24) Murphy, Rhoads. "The Ottoman Resurgence in the Seventeenth-Century Mediterranean", *Mediterranean*

Historical Review, 8/2 (1993), pp. 186–200.

- (24) Murphey, “The Ottoman Resurgence”, pp. 191–92.
- (25) 例へば、大宰相メレキ・アフメド・メフメト・メレク Ahmed Paşa (一六六二年没) や一六五一年に完結した「カレメン船のついで」Gökay, “Tefiriat Hakkında Belgeler,” p. 60°
- (26) Bostan, *Osmanlı Bahriye Teshkilâtı*, pp. 187–224. Şen, Gül, “Galley Slaves and Agency: The Driving Force of the Ottoman Fleet”, in *Slaves and Slave Agency in the Ottoman Empire*, Göttingen: V & R Unipress and Bonn University Press, 2020, pp. 131–63. 海軍工廠の半隷属的の医療について Mossensohn, Miri Shefer, “Medical Treatment in the Ottoman Navy in the Early Modern Period”, *JESHO*, 50/4 (2007), pp. 542–68. ※参照。
- (27) Bostan, İdris, “Osmanlı Donanmasında Kurekçi Temini Meselesi ve 958 (1551) Tarihli Kurekçi Defterleri”, in *Beşikten İmparatorluğa Osmanlı Denizciligi*, İstanbul: Kitap Yayınevi, 2006, pp. 59–76.
- (28) 多田守「十七世紀のオスマン朝における漕手徴発—ボル郡における事例分析を通じて—」『西南アジア研究』九一号、二〇二〇年、二五—七二頁。
- (29) 多田守「十六世紀中頃のオスマン朝における漕手徴発をめぐって」『イスラム世界』九七号、二〇二二年、一—四四頁。
- (30) Şen, Gül, “Between Two Spaces: Enslavement and Labor in the Early Modern Ottoman Navy”, Stephan

Conermann et al. (ed.), *Comparative and Global Framing of Enslavement*, Berlin: Walter de Gruyter, 2023, pp. 133–66.

- (31) Pedani, Maria Pia, “Ottoman Ships and Venetian Craftsmen in the 16th Century”, in *Technology and Trade: Studies in Turkish Maritime History*, İstanbul: Denizler Kitabevi, 2014, pp. 460–64.
- (32) Fleet, Kate, “Ottoman Expansion in the Mediterranean”, in Suraiya N. Faroqi and Kate Fleet (ed.), *The Cambridge History of Turkey*, Vol. 2, Cambridge: Cambridge University Press, 2012, pp. 141–72, esp. pp. 157–58.
- (33) Fabris, Antonio, “A Description of the Ottoman Arsenal of İstanbul (1698)”, *Mediterranean: Ricerche Storiche*, 34 (2015), pp. 435–44.
- (34) Gürkan, Emrah Safa, “Fitiin Ucunda Tersane-yi Âmir'e, in *Osmanlı İstanbullu: I. Uslularası Osmanlı İstanbullu Sempozyumu, Bildiriler*, İstanbul: İstanbul 29 Mayıs Üniversitesi Yayınları: İstanbul Büyükşehir Belediyesi Kültür A. Ş., 2017, pp. 43–70.
- (35) Çetin, Atilla, “Garp Ocakları”, in *DiA*, vol. 13, 1996, pp. 382–86.
- (36) Cezar, Mustafa, *Osmanlı Tarihinde Lenendler*, İstanbul: Çelikkilit Matbaası, 1965.
- (37) Hess, Andrew C., *The Forgotten Frontier: A History of the Sixteenth Century Ibero-African Frontier*, Chicago:

- University of Chicago Press, 1978.
- (38) Murphey, "The Ottoman Resurgence", p. 189.
- (39) Gürkan, Emrah Safa, *Sultanın Casusları: 16. Yüzyılda İstihbarat, Sabotaj ve Rüşvet Ağları*, İstanbul: Kronik Yayıncılık, 2017; Gürkan, Emrah Safa, *Sultanın Korsanları, Osmanlı Akdenizinde Gazâ, Yağma ve Esaret, 1500-1700*, İstanbul: Kronik Kitap, 2018.
- (40) Orhunlu, Cengiz, "Hint Kaptanlığı ve Piri Reis", *Belleten*, 34/134 (1970), pp. 235-54; Orhunlu, Cengiz, *Osmanlı İmparatorluğunun Güney Siyaseti: Habeş Eyaleti*, İstanbul: Edebiyat Fakültesi, 1974.
- (41) Özbaran, Salih, *Ottoman Expansion toward the Indian Ocean in the 16th Century*, İstanbul: İstanbul Bilgi University Press, 2009.
- (42) Sevinç, Tahir, *Osmanlı İdaresinde Süveyş Donanması: Süveyş Tersanesinde Gemi İnşası, 16-18. Yüzyıllar*, İstanbul: İdeal Kültür Yayıncılık, 2021.
- (43) Sevinç, Tahir, *Basra Donanması, Birecik ve Basra Tersanelerinde Gemi İnşa Faaliyetleri: 16-18. Yüzyıllar*, İstanbul: İdeal Kültür Yayıncılık, 2022.
- (44) Tekindağ, Şehabettin, "Halic Tersanesinde İnşa Edilen İlk Türk Donanması ve Cafır Kaptanım Arızası", *Belgelerle Türk Tarih Dergisi*, 7 (1968), p. 66.
- (45) 中井やぶ次郎ほかの編『中井やぶ次郎の造船技術の発展』(1974) Pyör, John H., *Geography, Technology and War: Studies in the Maritime History of the Mediterranean, 649-1571*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988. 中井やぶ次郎の編。
- (46) Kahane, Henry and Renée, and Andreas Tietze (eds.), *The Linga Franca in the Levant: Turkish Nautical Terms of Italian and Greek Origin*, Urbana University of Illinois Press, 1958.
- (47) Soucek, Savat, "Certain Types of Ships in Ottoman Turkish Terminology", *Turica*, 7 (1975), pp. 233-49.
- (48) Bostan, İdris, *Kürekli ve Yelkenli Osmanlı Gemileri*, İstanbul: Bilge Yayın Haberçilik ve Danışmanlık, 2005; 大谷直「新正親公 Idris Bostan, Kürekli ve Yelkenli Osmanlı Gemileri (記『オスマン朝の艦船』) (イスタンブール、二〇〇五年) A4 変形判四六二頁」『明大ムック叢書』十二号、二〇〇八年、一〜九二頁。なな本書が大谷直の著であるが困難であるが、Bostan, İdris, *Osmanlılar ve Deniz, Deniz Politikaları, Teşkilatı, Gemileri*, İstanbul: Küre Yayınları, 2017. 二つは図説や「船渠鑑」などによって著者の加筆修正や二つは再出版である。
- (49) Beydiz, Mustafa Gürbüz, *Osmanlı Gemi Tasvirleri*, İstanbul: Kabalcı Yayıncılık, 2013.
- (50) Aydın, Yusuf Alperen, "Technological Developments in the Imperial Dockyard (Tersane-i Amire): Anchor Manufacture for the Galleons of the Ottoman Navy", in Nergis Günsenin (ed.), *Between Continents: Proceedings of the Twelfth Symposium on Boat and Ship Archaeology, Istanbul 2009*, İstanbul: Ege Yayınları, 2012, pp.

183-87

- (51) フェルナン・ブローテル、浜名優美訳『地中海』第二巻、藤原書店、二〇〇四年、四一八―七六頁。
- (52) Guilmartin, John Francis, *Gunpowder and Galleys: Changing Technology and Mediterranean Warfare at Sea in the Sixteenth Century*, London & New York: Cambridge University Press, 1974. ナリントン・ペリギンの地中海への進出は軍事的な面よりも経済的な面で重要であったとする指摘について、Greene, Molly, "Beyond the Northern Invasion: The Mediterranean in the Seventeenth Century", *Past & Present*, 174/1 (2002), pp. 42-71 を参照。
- (53) Imber, Colin, "The Navy of Süleyman the Magnificent", pp. 228-35, 領内資源が賄えなくなったオスマン海軍の強みは、ハヤメイト二世（在位一四八―一五二一年）時代から存在したとみる（Brummett, Palmira, *Ottoman Seapower and Levantine Diplomacy in the Age of Discovery*, New York: State University of New York Press, 1994）。
- (54) オスマン帝国における火器や大砲技術については Ágoston, Gábor, *Guns for the Sultan: Military Power and the Weapons Industry in the Ottoman Empire*, New York: Cambridge University Press, 2005 を参照された。
- (55) 宮武志郎「一五・一六世紀オスマン海軍による大砲技術の受容―ユダヤ教徒の役割の一端―」『オリエンタル』三
四巻一号、一九九一年、四八―六四頁。
- (56) Murphy, "The Ottoman Resurgence", p. 199.
- (57) Bostan, İdris, "XVII. Yüzyılda Gemi Teknolojisinde Değişim: Kadırgadan Kalyona", *Osmanlı Araştırmaları*, 24 (2004), pp. 65-86. ガレオン船の第一導入期にオスマン海軍が直面した困難とオスマン宮廷の政治的混乱について、澤井一彰「ヴェネツィアによる一六五〇年のターネルス海峡封鎖とオスマン朝―女人政治の時代からキョプリュリュク家の時代へ―」小田淑子先生退職記念論文
集』二〇一八年、七五―九七頁を参照。
- (58) Bostan, "Gemi Teknolojisinde Değişim", pp. 80-83.
- (59) Bostan, "Gemi Teknolojisinde Değişim", pp. 76-80.
- (60) Pedani, "Ottoman Ships and Venetian Craftsmen", pp. 460-64.
- (61) Eickhoff, Ekkehard, "Akdeniz'deki Osmanlı Deniz Cephesi (XVI-XVII. Yüzyıl)", in *Osmanlı, I, Siyaset*, Ankara: Yeni Türkiye Yayınları, 1999, pp. 384-91.
- (62) Büyüktugrul, Afif, "Preveze Muharebesine İlişkin Belgeler", *Belleten*, 42/168 (1978), pp. 629-66; Bostan, İdris, "Preveze Deniz Muharebesi", in *DiA*, vol. 34, pp. 343-45.
- (63) Şimşirgil, Ahmet, and İbrahim Pazan, *Denizler Fatihi Piyale Paşa, Cerbe Zaferi*, İstanbul: Timaş Yayınları, 2015.
- (64) Öndes, Osman, *Turgut Reis'in Son Seferi: Malta Kustması*, İstanbul: Timaş Yayınları, 2011.
- (65) Bostan, İdris, "İnebahtı Deniz Savaşı" in *DiA*, vol. 22,

- 2000, pp. 287-89.
- (69) Naki, Emrah, "1574 Tunus Seferi Üzerine Yeni bir Bakış", *OTAM*, 40 (2016), pp. 129-44.
- (70) 代表館長より Gulsoy, Ersin, *Giritin Felhi ve Osmanlı İdaresinin Kuruluşu*, İstanbul: Tarih ve Tâbiat Vakfı, 2004; Cengiz, Hasan Ali, "Osmanlı Kaynaklarında Girit Seferi", *Trakya Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Dergisi*, 9/17 (2019), pp. 105-33.
- (71) 本邦へ海軍の派遣に關する歴史資料をめぐって, Gencer, Ali İhsan, "Osmanlı Türklerinde Denizcilik", in Güler Eren (ed.), *Osmanlı, 6, Teşkilât*, Ankara: Yeni Türkiye Yayınları, 1999, pp. 569-89; Soucek, Svatopluk, *Ottoman Maritime Wars, 1416-1700*, İstanbul: The Isis Press, 2015 を参照すること。
- (72) Orhonlu, Cengiz, "Habeş Eyaleti", in *DİA*, vol. 14, 1996, pp. 363-67.
- (73) Özbaran, Salih, *Yemen'den Basra'ya Sınırdaki Osmanlı*, İstanbul: Kitap Yayınevi, 2004; Özbaran, *Ottoman Expansion toward the Indian Ocean*.
- (74) Casale, Giancarlo, "The Ethnic Composition of Ottoman Ship Crews and the 'Rumi Challenge' to Portuguese Identity", *Medieval Encounters*, 13 (2007), pp. 122-44.
- (75) 今松泰「オスマン海軍提督のムハンマド海からの帰還—北インペ、中央アジア、イランを通って」守川知子編『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会、二〇一六年、八九—一二頁。
- (76) Casale, Giancarlo, *The Ottoman Age of Exploration*, Oxford: Oxford University Press, 2010; 書籍「書誌」ハンカ・ロ・カキーン著『オスマン帝国の「大航海時代」』『史料』七十巻三号、二〇一八年、四〇六—一七頁。
- (77) Emiralioğlu, Pinar, *Geographical Knowledge and Imperial Culture in the Early Modern Ottoman Empire*, Farnham: Ashgate Publishing Limited, 2014.
- (78) Brunnmet, Palmira, "Geographical Knowledge and Imperial Culture in the Early Modern Ottoman Empire: By Pinar Emiralioğlu, Farnham, Surrey: Ashgate, 2014", *Imago Mundi*, 67/2 (2015), pp. 247-48.
- (79) Yıldırım, Filiz, *Nazlı Tuna'nın İnce Donanması (18. Yüzyıl)*, İstanbul: Hiper yayınları, 2019; Kaya, Ali İftan, "XVII. Yüzyılda Osmanlı İdaresindeki Tuna Nehri (1683-1700): Donanma, İşkeleler, Zahire Alımı ve Nakliye", *Karadeniz İncelemeleri Dergisi*, 16/32 (2022), pp. 369-96.
- (80) Bostan, İdris, "Osmanlı Sefer Organizasyonundan Bir Kesit: 16. ve 17. Yüzyıllarda Tuna'da Kurulan Askeri Köprüler", in Şakir Batmaz and Özen Tok (eds.), *Osmanlı Devleti'nde Nehirler ve Göller*, Kayseri: Not Yayınları, 2015.
- (81) Aslan, Seyfullah, "Tuna Donanmasının Kuruluşu Meslesi", in *Kanuni Sultan Süleyman ve Dönemi, Yeni Kaynaklar, Yeni Yaklaşımlar*, İstanbul: İbn Haldun Üniversitesi, 2020, pp. 77-104.

- (76) 代表的なもので Ostapchuk, Victor, "An Ottoman Gazanâme on Halil Paşa's Naval Campaign against the Cossacks (1621)", *Harvard Ukrainian Studies*, 14/3-4 (1990), pp. 482-521; Ostapchuk, Victor, "The Human Landscape of the Ottoman Black Sea in the Face of the Cossack Naval Raids", *OM*, 20/1 (2001), pp. 23-95.
- (80) Cevrioğlu, Mahmut Halef, "Kaptan-ı Derya Hasan Paşa'nın Özi Serdarlığı (1626-1627)", *Ankara Anadolu ve Rumeli Araştırmaları Dergisi*, 3/5 (2022), pp. 51-69.
- (81) Isom-Verhaeren, Christine, *Allies with the Infidel: The Ottoman and French Alliance in the Sixteenth Century*, London-New York: I. B. Tauris, 2011.
- (82) Acipınar, Mikail, "Osmanlı Kronikleri Işığında Kaptan-ı Derya Halil Paşa'nın Akdeniz Seferleri (1609-1623)", *Tarih İncelemeleri Dergisi*, 28/1 (2013), pp. 5-36.
- (83) Tabakoğlu, Hüseyin Serdar, *Akdeniz'de Sanas: Osmanlı İspanya Mücadelesi*, İstanbul: Kronik Kitap, 2019; Naki, Emrah, *Akdeniz'de Hâkimiyet Mücadelesi*, 16. Yüzyılın Siyasi ve İktisadi Ortamında İspanya-Osmanlı İlişkileri (1571-1581), İstanbul: Selenge Yayınları, 2020.
- (84) キプロス脱征時の航海日記について Bostan, İdris, "Kıbrıs Seferi Günlüğü ve Osmanlı Donanmasının Sefer Güzergâhı", in *Beylikten İmparatorluğa Osmanlı Denizciligi*, İstanbul: Kitap Yayınevi, 2006, pp. 87-110. ※参照: オスマン海軍に同行したヨーロッパ人が五〇日ほど地中海を一周したと主張しているが、E・ギネルカンはこの記

述の正確性について否定的な見解を示している (Gürkan, Emrah Safa, "50 Günde Devri-i Bahr-i Sefid, Königsbergli Lubenau'nun Kadirgavla İmtihanı", *Osmanlı Araştırmaları*, 43 (2014), pp. 273-300.)。

- (85) Çarın, Fuad, *Türklerin Denizciligi, Oruc Reis ve Garb Ocakları, Hind Denizlerinde Türk-Portekiz Elçilikleri*, Berksoy Matbaası, 1965.
- (86) オスマン帝国の地理学研究について、小笠原弘幸「地理書 (Coğrafya Literatürü) にオスマン帝国史料解題 <http://bias.jp/ottomansources/cograpy-literaturu> (consulted online on 26 September 2023) を参照されたこと。『海防の書』について、新谷浩一郎の研究がある (新谷浩一郎「Kitab-ı Bahriyya」の性格 - Ayasofya 2612号本文を中心として『東洋史研究』四九卷二号、一九九〇年一〇七—一三九頁; 新谷浩一郎「地中海国家オスマン朝とヨーロッパ・ベース作品」近藤信彰 (編)『近世イスラーム国家史研究の現在』東京外国語大学メキシコ・アフリカ言語文化研究所二〇一五年、二二—四二頁)。
- (87) Bostan, İdris, "Barbaros Hayreddin Paşa", in *DİA*, vol. 5, 1992, pp. 65-67; Bostan, İdris, "Oruç Reis", in *DİA*, vol. 33, 2007, pp. 426-28.
- (88) İz, Fahir, "Barbaros Hayreddin Paşa Gazavatnamesi Üzerinde Yeni Bir Araştırma", *Bellekten*, 20 (1972), pp. 81-92.
- (89) Soucek, S., "The Rise of The Barbarossas in North Africa", *Turcica*, 7 (1974), pp. 238-50.

- (6) Murphey, Rhoads, "Seyyid Murad's Prose Biography of Hızır ibn Yakub, Alias Hayreddin Barbarossa", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 54/4 (2001), pp. 519-32; Lowry, Heath W., "Lingering Questions Regarding the Lineage, Life & Death of Barbaros Hayreddin Paşa", in Marios Hadjianastrasis (ed.), *Frontiers the Ottoman Imagination: Studies in Honour of Rhoads Murphey*, Leiden: Brill, 2014, pp. 185-212.
- (15) Bostan, İdris, "Kemal Reis", in *DİA*, vol. 25, pp. 226-27.
- (25) Orhonlu, Cengiz, "Turgut Reis ve Korsika Baskını", *Belgelerle Türk Tarihi*, 15 (1968), pp. 69-73; Bostan, İdris, "Turgut Reis", in *DİA*, vol. 41, pp. 417-18.
- (35) Էմիռ Սուլթան Բեկ Վահան, Բոստան, "Kılıç Ali Paşa", in *DİA*, vol. 25, pp. 410-12.
- (35) Soucek, Svatopluk, *Piri Reis and Turkish Mapmaking After Columbus: The Khalili Portolan Atlas*, London: Kibo Foundation, 1996.
- (55) Էզեթ Բեյ, *Harita-i Kâpudân-ı Deryâ, Osmanlı Kâpudânıyaları (1352-1853)*, Cemil Sağlam (ed.), İstanbul: Türkiye Yazma Eserler Kurumu Başkanlığı Yayınları, 2021 Էջեր 59-60
- (65) Bostan, İdris, "Piyâle Paşa", in *DİA*, vol. 34, 2007, pp. 296-97.
- (75) Türkçelik, Evrim, "Damad Halil Paşa (ö. 1603): Mühtedil Bir Osmanlı Paşasının Hayatı ve Kariyeri", *Nesir Hacı Bektaş Veli Üniversitesi SBE Dergisi*, 12/3 (2022), pp. 1638-52; Türkçelik, Evrim, "The Reluctant Admiral: Damad Halil Pasha and the Ottoman Navy (1595-1598)", *Mediterranea Ricerche Storiche*, 2023, pp. 1-28.
- (85) Acıpinar, "Halil Paşanın Akdeniz Seferleri (1609-1623)".
- (95) Çevrioğlu, "Hasan Paşanın Özi Serdarlığı (1626-1627)".
- (99) Menekşe, Metin, "17. Yüzyılda Osmanlı Devletinde Maktul İken Maktul Olan Bir Devlet Adamı: Kaptan-ı Derya Silahdar Yusuf Paşa (1604-1646)", *Stratejik ve Sosyal Araştırmalar Dergisi*, 5/3 (2021), pp. 527-53.
- (105) Pedani, Maria Pia, "Safye's Household and Venetian Diplomacy", *Turrica*, 32 (2000), pp. 9-32; Gürkan, Emrah Safa, "His Bilo's Kapudan: Conversion, Tangled Loyalties and Hasan Veneziano between İstanbul and Venice (1588-1591)", *Osmanlı Araştırmaları*, 48 (2016), pp. 277-319.
- (115) Ocakaçan, Levent Kaya, "Cigalazade Yusuf Sinan Paşa (c. 1545-1606)", *Mediterranea Ricerche Storiche*, 34 (2015), pp. 325-40.
- (125) Türkçelik, Evrim, "Meritocracy, Factionalism and Ottoman Grand Admirals in the Context of Mediterranean Politics", in *A Europe of Courts, a Europe of Fac-*

tions, Leiden-Boston: Brill, 2017, pp. 88-108.

- (70) Isom-Verhaaren, Christine, "Patronage in the Ottoman Navy During the Late 15th and 16th Centuries", in *Piri Reis Sembözüümü*, 2014, pp. 17-30. 44頁 時のスルタン・メスリット三世（在位一五七四―一九五年）の娘婿シュカラザーレ・スィナン・パシヤが海軍提督として任命されたため、シュナムが海軍提督として任命されたことがあった。

- (90) Isom-Verhaaren, Christine, "Tracking the Life of Hüsam Bey: Career Path in the Sixteenth-Century Ottoman Navy", in *Ottoman War and Peace: Studies in Honor of Virginia H. Aksan*, Leiden-Boston: Brill, 2020, pp. 291-314.

- (90) ハビブ・海軍の近代化を導いた Gencer, A. İhsan, *Bahriye'de Yapılan Islahat Hareketleri ve Bahriye Nezaretinin Kuruluşu (1789-1867)*, Ankara: Türk Tarih Kurumu Yayını, 2001; Zorlu, Tunçay, *Innovation and Empire in Turkey: Sultan Selim III and the Modernisation of the Ottoman Navy*, London and New York: Tauris Academic Studies, 2008. や 近代化以降のハビブ・海軍については小松によれば優れた一連の研究を参照のよう。代表的なもののとして、小松香織『オスマン帝国の海軍と海軍』山川出版社、二〇〇一年。

- (90) Imber, "The Reconstruction of the Ottoman Fleet".
(80) Ágoston, Gábor, *The Last Muslim Conquest: The Ottoman Empire and Its War in Europe*, Princeton and

Oxford: Princeton University Press, 2021, pp. 240-47.

- Isom-Verhaaren, *The Sultan's Fleet*, p. 128; Bostan, İdris, "Ottoman Attitude Towards the Defeat at Lepanto (1571)", *Libros de La Corte*, 26 (2023), pp. 191-209.

- (80) Panzac, Daniel, *La marine Ottomane: De l'opogée à la chute de l'empire, 1572-1923*, Paris: CNRS, 2009.

- (00) Soucek, *Ottoman Maritime Wars*.

- (11) Ahmet Cevdet Pasa, *Tarih-i Cevdet*, vol. 1, Seyki Nezihi Aykut (eds.), Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2018, p. 163.

- (21) Panzac, *La marine Ottomane*, pp. 95-140; Soucek, *Ottoman Maritime Wars*.

- (31) Kâtib Çelebi, *Deniz Savaşları Hakkında Büyüklere Arnuğan: Tuhfetü'l-kibar fi Esfâr'i-bihâr*, İstanbul: Kabaacı, 2007; Bostan, İdris (ed.), Kâtib Çelebi, *Tuhfetü'l-kibar fi Esfâr'i-Bihâr*, Ankara: Türkiye Bilimler Akademisi, 2018.

- (41) Fodor, Pál, "Between Two Continental Wars: The Ottoman Naval Preparations in 1590-1592", in *Armagán, Festschrift Für Andrews Tietze*, Prague: Enigma Corporation, 1994, pp. 90-111; Greene, Molly, *Catholic Pirates and Greek Merchants, a Maritime History of the Mediterranean*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2010, esp. pp. 3-12.

- (51) Fodor, Pál, "The Organization of Defence in the Eastern Mediterranean (End of the 16th Century)", in *The*

Kapudan Pasha, pp. 87-94.

- (116) Bostan, İdris, "DeryaBeyi", in *DİA*, vol. 9, pp. 200-01.
一六世紀末から一七世紀初頭における沿岸警備において
デルヤー・ベイが船団として重要な役割を担ったことに
関する試論として、拙稿「近世オスマン帝国におけるデ
ルヤー・ベイ船団の編成と役割」『イスラム世界』九九号、
二〇一三年、一—一七頁。

- (117) Zahirović, Nedin, *The Register of Ottoman-Venetian
Diplomatic Affairs at Leipzig University Library (1625-
1640)*, Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2020.